

ジョン・シンクレアーの貧民救済論について

関, 源太郎
九州大学大学院経済学研究院

<https://doi.org/10.15017/3773>

出版情報：経済學研究. 71 (2/3), pp.89-106, 2005-03-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

ジョン・シンクレアーの貧民救済論について

関 源 太 郎

Sir John Sinclair on Poor Relief

Gentaro SEKI

はじめに

18世紀末のスコットランドでは急速な工業化が展開し始め、それにともなって人口の増加と移動、都市化、社会的変動などが、これまでにない規模で進展した。18世紀半ば過ぎから農業でも製造業でも市場経済化への道を本格的に進むことになったからである。

ローランド地方の農村では、特に1780年代から零細農場は再編・統合され、農地の囲い込みが急速に進行した。その結果、「伝統的な農業社会」は解体し「新しい農村社会の秩序」が確立した。また、ハイランド地方では、「散発的な抵抗と社会的疎外」を伴いつつ「ハイランド・クリアランス」（土地清掃）と呼ばれる歴史過程が進展した。いずれも、イングランドやローランドの工業化にしたがって、そのための原料や食糧の生産と供給を目指した市場経済化の過程であった¹⁾。

他方、このような農村での展開と密接に結びついていた製造業の発展、工業化はどうであったらうか。1727年に設立された「スコットランド漁業・製造業振興評議会」はリネン産業の

育成に力を傾注してきたが²⁾、そのせいもあってかりネン製造業はスコットランドの主要な製造業にまで成長し、さらに19世紀初頭にかけてダンディーを中核とする東海岸を中心に発展した³⁾。1770年代からは繊維産業のリネン布から綿布への転換が始まる⁴⁾。当初、機械の動力源が主に水力であったため工場建設はスコットランド全土の内陸部に展開したが、やがて18世紀も末になるとグラスゴウ、ペイズリーを中心とする西海岸地方に集中する傾向が表れてきた。それは、ブームに煽られて建設が進められたも

1) T. M. Devine, 'The Making of Industrial and Urban Society: Scotland 1780-1840', in *Exploring the Scottish Past. Themes in the History of Scottish Society*, East Linton: Tuckwell Press, 1995, pp. 108-109.

2) スコットランド漁業・製造業振興評議会の活動については、cf. Alstair Durie, *The Scottish Linen Industry in the Eighteenth Century*, Edinburgh: John Donald, 1979. また、関源太郎『「経済社会」形成の経済思想—18世紀スコットランド「経済改良」思想の研究—』ミネルヴァ書房、1994年、18～34ページも参照。

3) Christopher A. Whatley, *Scottish Society 1707-1830. Beyond Jacobitism, towards industrialisation*, Manchester: Manchester University Press, 2000, pp.229-230.

4) *Ibid.*, pp.225-226.

の市況が厳しくなると冒険主義的な業者は脱落したし、また原料の原綿の主要輸入港はグラスゴウであったが、この点でも市場からの距離の点でも立地条件に関して内陸部は劣っていたからである⁵⁾。動力源として蒸気が活用されたことが、このことを決定づけた。エネルギー源は石炭であったが、石炭輸送には1793年に開通したモンクランズ運河がおおいに貢献した⁶⁾。さらに、農業の市場経済化によって農村からの移住やアイアランドからのこの地方への移民が「労働コストを引き下げておく潜在力」として作用し続けたし、さらに女子労働がこの傾向を強めた⁷⁾。

このような工業化の過程は、当然スコットランド社会の急速な都市化現象を生み出すことになった。それは当時のヨーロッパの諸国のなかでも、イングランドを唯一の例外として、群を抜いていた⁸⁾。急激な都市化は人口の過密化をもたらし、住宅、衛生、保健などの面で都市問題を引き起こすと同時に、貧困問題・貧民救済問題をよりいっそう顕在化させた⁹⁾。例えば、急速な工業化と都市化が進行したグラスゴウについて言えば、1774年に貧民救済のために一種の租税である「割当金」(assessment)制度が導入されると同時に、院外救済が正式に導入された。さらに、この制度自体について、1818

年以降になると「異議申し立て」がなされるようになった¹⁰⁾。

実際、1824年にトマス・ケネディは「割当金」をすでに貧民台帳に記載されている者の救済に限定する法案を庶民院に提出したし¹¹⁾、その際参考にされたトマス・チャーマーズによるグラスゴウ、セント・ジョーンズ教区における貧民救済の「実験」は1819年に着手され、一定の成功をおさめていた¹²⁾。ナポレオン戦争とその後の経済不況から大きな影響を受けていたのは確かであろうが、明らかに、急速な工業化・都市化の進展は、スコットランドの貧民救済の問題を深刻化させていた。

こうしたなかで、本稿で取り上げるサー・ジョン・シンクレアー(Sir John Sinclair of Ulste, 1st Baronet, 1754-1835)も、この問題に関わったひとりであった。

シンクレアーは、当時のスコットランドの地主階級の子弟にふさわしく、スコットランドおよびイングランドで高等教育を終えると、ヨーロッパ旅行に出かけ、また法曹界入りも果した。その後、庶民院議員を勤めるかたわら、農業省(the Board of Agriculture)の長官を勤めると同時に、スコットランドの諸地方の主として

5) *Ibid.*, p.227.

6) R. H. Campbell, *Scotland since 1707. The Rise of an Industrial Society*, Oxford: Basil Blackwell, 1971, pp.88-89; Christopher A. Whatley, *The Industrial Revolution in Scotland*, Cambridge: Cambridge University Press, 1997, p.34.

7) Whatley, *Scottish Society 1707-1830*, pp. 227-8, 229.

8) Devine, 'Scottish Urbanisation', in *Exploring the Scottish Past*, p.109.

9) *Ibid.*, p.129; Whatley, *Scottish Society 1707-1830*, p.85.

10) R. A. Cage, 'The Nature and Extent of Poor Relief', in R. A. Cage (ed.), *The Working Class in Glasgow 1750-1914*, London: Croom Helm, pp.84-85.

11) Stewart Brown, *Thomas Chalmers and the Godly Commonwealth in Scotland*, Oxford: Oxford University Press, 1982, pp.154-163; Rosalind Mitchison, *The Old Poor Law in Scotland*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2000, p.151-153.

12) R. A. Cage and O. A. Checkland, 'Thomas Chalmers and Urban Poverty: The St. John's Parish Experiment in Glasgow, 1819-1837', in *The Scottish Philosophical Journal*, No.13, 1976; Brown, *op. cit.*, chap. 3; 関源太郎「トマス・チャーマーズの窮民対策思想」『経済学史学会年報』42号、2002年。

農業状態をレポートした一連の『農業の概観』(The General Views of Agriculture, 1794-1813)の刊行や「スコットランド漁業協会」の企画などにもかかわり、スコットランドにおける農業知識の普及やハイランド地方の経済開発にも尽力した。その一方で、シンクレアーは、『イギリス帝国の公収入の歴史』(A History of the Public Revenue of the British Empire, 1785-89)をはじめ、通貨改革に関する著作などもを出版し、また、「計画村」(planned village)の建設をはじめ所領経営にも精を出すなど、多面的な分野で足跡を残している¹³⁾。

そうしたなかで特筆されるのは、シンクレアーの主導権のもと9年の歳月をかけ合わせて20巻にのぼった『統計によるスコットランドの評価』(The Statistical Account of Scotland, XX Vols., 1791-99)の出版であろう。この大部な『統計によるスコットランドの評価』が完成するにあたって、シンクレアーはさまざまな点で恵まれてはいたが¹⁴⁾、それでも、完成にたどり着く道は決して平坦というわけではなかった。

これ [『統計によるスコットランドの評価』] が、一般的に体系的なかたちをとって、そのうえ、広範な重要な緒論点に関するこれほどの程度の情報を含んで完成されたのは、900人以上に及ぶ教会付き牧師が、この国の進歩とその住民たちの生活の全般的な改善とに欠かせない気高く愛国的な仕事に協力するように説得したシンクレアーの能力に依存してい

た¹⁵⁾。

『統計によるスコットランドの評価』のリプリント版の「序」でウィズリントンは、シンクレアーの献身振りと組織能力のしだいをこのように評した。また、ウィズリントンによれば、当初、この計画に乗り気でないばかりでなくむしろはじめから「嫌っていた牧師たち」もいたし、そのうえ、教区の牧師たちの報告書の提出は必ずしも順調ではなかった。その原因は、一つには、特に財産や収入などが知れることになるとのではないかとの恐れが生じたからであった。いわゆる、「プライヴァシー問題」とも言えようか。

実際に、シンクレアー自身、1791年に、2巻目以降の出版予定を知らせるとともに、この事業に国王から2,000ポンドが下賜されたことを伝えた各教区牧師宛の「第三回状」において、「作成者の名前は、もし省略してほしいならば、記入しなくても結構です。また、いかなる個人に対しても心配をかける可能性のある情報はまったく望んでおりません」¹⁶⁾とことわらざるを得なかった。こうした困難をともなったが、「次の世紀が始まる頃には」完結を期したこの事業は、1799年に完成した。すでに述べたように、この時期のスコットランドは農業革命と産業革命が進行していたので、そのもとでの社会経済の様相を映す出す貴重な歴史的資料となった。

その後、シンクレアーはみずからペンを取り、

13) シンクレアーの包括的な研究として、管見の範囲では、Rosalid Mitchison, *Agricultural Sir John. The Life of Sir John Sinclair of Ulbster 1754-1835*, London: Geoffery Bles, 1962.がある。

14) *Ibid.*, p.121.

15) Donald J. Withrington, 'General Introduction' in *The Statistical Account of Scotland 1791-1799*, edited by Sir John Sinclair, Volume I General, Walefield: EP Publishing Limited, 1983, p.x. []内は筆者による補充。以下同様。

16) Sir John Sinclair (ed.), *The Statistical Account of Scotland*, Vol.1, Appendix, D., p.53.

この『統計によるスコットランドの評価』を基にし、また、その後の新たな歴史の展開をふまえて、『統計によるスコットランドの評価についての分析』(*Analysis of the Statistical Account of Scotland; with a General View of the History of That Country, and Discussion on Some Important Branches of Political Economy*, 2 Parts, London, 1826.) を出版した。本稿では、この『分析』をテキストにして、急速な経済発展と劇的な社会変動のなかで生じた貧民問題・貧民救済問題について、シンクレアーがどのように捉えていたかを検討してみたい。だが、このことに直接取りかかる前に、シンクレアーが使った「統計学」ということの意味を簡単に確かめておきたい。

I 「統計学」的研究

彼が「統計学」という言葉を使用したのは、『統計によるスコットランドの評価』を計画した時に、スコットランド教会の牧師たちにその基になった資料の収集・提供に対する協力を要請した書簡においてであった。

スコットランド教会の牧師宛の第一回状
拝啓

親愛の情をもって、ここに同封した質問状をあなたのもとにお届けいたします。というのも、これらの王国〔スコットランドとイングランド〕におけるもっとも尊敬すべきかつ名高い方々の賛同を得てきた計画には、あなたの方の支援が与えられると思うからです。

国の実際の政治的状況に関する情報を調達することは、いずれの時代でも賢明な政治家たちが望ましいと思ってきたことですが、こ

の啓蒙の時代には、まさしくもっともなくてはならない社会的に重要なものだと考えられます。

〔ヨーロッパ〕大陸の多くの地方で、特にドイツではそれらの地方以上に、——彼らはこう呼んでいるのですが——統計学的研究がなされてきており、それは非常に広範にわたっています。しかし、スコットランドほど、この統計学的研究が完全になっていない国は他にはどこにもないと思われます。スコットランドには、誇るべき教会制度があり、その構成員たちは、個人の美德、知性、および能力のみならず社会的目的を目指す点で、どの国民にもひけをとらないにもかかわらず、そうだと思われます。

私は密かにこう思っています。このことに際して、スコットランド教会の構成員たちは、進んでみずから援助の手をさしのべ、この企画を推し進めるであろう、と。この企画は、この国全般に対して確実に役立つでしょうし、だから、すでにスコットランド教会が社会的統一のために正当にも得てきた評判と品位とを必ずや増すことになるでしょう¹⁷⁾。

この後に、「新旧の教区の名」に関する質問から始まり、「イングランド、アイアランド、あるいは、ブリテン領植民地生まれの住民数」についての質問まで、合計75項目にもわたって質問が続けられている。うへのシンクレアーの書簡のなかの「統計学的研究」という言葉には、「すなわち、人口、政治的〔社会の〕状況、国の生産および他の国家に関する重要事項についての研究」という注記が施されている。この点

17) *Ibid.*, Appendix, B., pp.39-40.

にこそ、シンクレアーが「統計学的研究」を重視した理由が隠されているように思われるが、そのことに直接取りかかる前に、シンクレアー自身が、『統計によるスコットランドの評価』の企画にいたったか——その経緯を説明しているのです、このことをまず検討しよう。というのは、そうすることによって、シンクレアーの意図がより鮮明になると思われるからである。

もともとシンクレアーには若い頃から「著述業」志向があつて、すでに1769年10月にわずか15歳と6ヶ月でエジンバラの新聞『カレドニアン・マーキュリー』に二度にわたり寄稿したことがあつた。それらはともに、ハイランド地方で「地代が引き上げられた結果、ハイランド地方の地元民たちが、彼らの故郷を捨て、アメリカへ移住するの必要に迫られたことを嘆いた」記事に触発されて書かれた。彼の「ハイランド・クリアランス」についての当時の考え方を述べたものであつた。

その最初のもの（1769年10月5日付）は、自分が「しばしばスコットランドのハイランド地方のあらゆる地域を旅行したことがあり、ハイランドは自分の生まれた地であり、かつ、自分の心のふるさとである」と明言したうえで、ハイランド地方の住民が一般に「怠惰で怠け者」であり、「自分たちの運営に任された土地を耕作したり、いかなる仕事でもその仕事に専心することによって、まともで快適な生活を得ようとするよりも、むしろ、領主や地主にこびへつらい、領主たちのテーブルから落ちたパンくずを手に入れようとするものだ」と所見を述べ、こうした事態をふまえて、「あるいは、むしろ彼ら〔地主たち〕は、地代を引き上げることによって、彼らの従者たちの勤労意欲（industry）をかき立て、彼らの土地をしらふで勤勉

な者たちによって満たそうと試みないであろうか」と提起している¹⁸⁾。

第二の寄稿文（1869年10月9日付）は、ハイランド地方からアメリカに移住した人たちの渡航途中での死亡をふくめての苦難ぶり、——もし幸いにしてアメリカに到着できたとしても、そこが渡航以前に想像していたほど決して快適なところでないこと、つまり、「自分たちと同じ程度の蛮人がいて、……宗教心と美徳を欠き同じように衣食にも事欠く」ような状態であると指摘し、「もしあなた方が、あなた自身とあなた方の親類および友人たちを汚名と不名誉から守ることを望むならば、あなた方の非常に愛すべき故郷を去ることをしないで頂きたい……」と要望している¹⁹⁾。

これら二つの寄稿文を合わせて考えると、当時16歳と半年になるシンクレアー少年は、ハイランド地方の一般的に貧しい人びとに、いたずらにアメリカ移住を選択するのではなく、ハイランドの故郷にとどまり、従来からの生活習慣から脱却して、勤労意欲を身につけ、規則正しい労働によって生活の糧を獲得するように主体形成を成し遂げ、ハイランド地方の貧困問題の解決をはかるべきだと考え、その提起を、ともかくも自分自身で見聞した「事実」に基づいて展開しようとしていた。

さらに、すでに「はじめに」で紹介したように、シンクレアーは『イギリス帝国の公収入の歴史』という二巻本の書物を1780年代に著していた。この著作の準備のために、彼は長年にわたって資料を収集してきたが、なかなか、それを整理し著述することに割く時間的余裕がなく、

18) *Ibid.*, Appendix, A. No. I, pp.36-37.

19) *Ibid.*, Appendix, A. No. II, pp.38-9.

両巻とも短期間で仕上げた、と述べている。そのうえで、『[[イギリス帝国の] 公収入の歴史]』の結びで私が意図したことは、この国の社会的 (Political) 状況に関する一般的所見を公衆の前に提示することであった。しかし、この問題の精通者になろうとして可能なあらゆる苦勞を試みたあとで、私が入手できたすべての情報はきわめて不完全であったので、この考えを断念せざるを得なかった。私がそうしたのは、かなりの程度不承不承であったのだが²⁰⁾ と、みずからの問題意識を表明している。彼がもともと意図したことは、ブリテンがいかなる社会的状況にあるのかを全体的に示すことであった。その場合に彼が基礎に据えたのは、「情報」であった。この情報収集が「不完全」であったことを、シンクレアーはみずからの欠陥だと捉えた。この点を克服するものが、スコットランド教会の教区牧師の協力であった。

こうして、すでに紹介した「スコットランド教会の牧師宛の第一回状」がしたためられた。すでに注意を喚起しておいたように、そこには、「統計学的研究」という言葉が使われていた。シンクレアー自身も述べているように、「多くの人はこの新しい言葉、統計学や統計的に最初は驚いた²¹⁾。この点に関連して、シンクレアーは次のように述べている。

……私が1786年にたまたま出かけた北ヨーロッパ中をまわる広範にわたるツアーの過程で、次のことを知った。すなわち、ドイツでは、ある種の政治学 (political inquiry) が研究

されていて、それに統計学という名称が当てられてきていた、ということを知った。私は、これとは違った考えをこの言葉に充当する。というのは、ドイツでこれによって意味されているのは、一国の政治的力を確かめるための研究、言い換えると、国事に関する研究を意味しているが、他方、私がこの術語に付加した考えは、一国の状態に関する研究であり、その目的は、その住民たちによって享受されている幸福の量、そして、それを将来増加する方法を確かめることであるからである²²⁾。

シンクレアーの「統計学」の意味は、彼自身がイタリック体で記した部分が十分に伝えている。ドイツの「統計学」は、国力を計り、国家運営のための道具として用いられていた。それに対し、シンクレアーの言う「統計学」は、一国の社会状態、その国における住民たちの生活状態、彼らがどの程度幸せに生活しているのかをまず確かめ、しかも、こうしたことを基礎にして、この生活をいっそう幸せなものにする手段を探ることを目的としていた。その意味では、ウィズリントンも指摘するように²³⁾、「将来それを〔住民たちの幸福を〕増加する手段」を確かめるといことが、シンクレアーの「統計学」の意味を見極める「鍵」になる。彼は、明らかに国民の幸福を増進するための政策提言に傾斜した実用的な思考を重視していたのである。

このことを実証するように、彼自身、「もし一般的な諸原理が実際に適用できないならば、それらの諸原理が理論的にはいかに見事だとしても、それらは、一般民衆が習得した限界を持つ

20) *Ibid.*, History of the Ogrigin and Progress of the Statistical Account of Scotland, p.24.

21) *Ibid.*, p.26. 傍点は原文のイタリックを表す。以下同様。

22) *Ibid.*, p.26.

23) Withrington, 'General Intruduction', p.xiv.

たものよりも断然価値が低いであろう。それゆえ、すべての人間の知識は、個別の諸事実を検討することに、その基礎が据えられなければならない。だから、一般的諸原理は、それらがこれらの一次的な諸要素に還元される限りにおいて、真実であったり有用であったりするのである²⁴⁾と明言している。そうだとすれば、このような実用的な措置を考案するためにも基礎資料、「事実」が重要になる。

近代の哲学が古代の哲学よりも優れているのは、まさしく、近代の哲学が事実に誠心誠意注意を払っていることによる。近代の哲学はこの点で特に際だっている。想像上の理論に基づくのではなく、調査と実験という確かな基礎にもとづいて、近代の哲学は、可能だと思われる程度に確実に傑出するようになってきた。政治的論考に関しても、これと同じ方法を追究することによって、すなわち、人類の状態を分析し、解剖学的な正確さと精密さをもって社会の内的構造を分析することによってこそ、はじめて政府に関する科学は、これと同じ完璧度に達することができる²⁵⁾。

スコットランド啓蒙の主要人物たちと同様に、シンクレアーも古代との比較において近代をこのように特徴づけた。近代の特徴は、「事実」の「調査と実験」にあると言うのである。しかし、うへの引用にも明らかなように、「事実」が収集されるだけでなく、それに基づき「社会の内的構造」が分析されなければならない。そ

の意味では、『統計によるスコットランドの評価』は、刮目すべき企画だとはいえ、これを基礎にスコットランド「社会の内的構造」を分析することこそが、シンクレアーがみずからの手で果たすべき仕事であり、こうして初めて、スコットランドにおける「政府の科学」も完成されるはずだ、と言える。そうだとすれば、『統計によるスコットランドの評価についての分析』の持つ意味は、決して小さくない。そのように意味づけることができる『統計によるスコットランドの評価についての分析』をひもといて、シンクレアーが「貧民・窮民問題」をどのように論じていたかを検討することにしよう。

II 貧民問題の状況と原因

シンクレアーは、『統計によるスコットランドの評価の分析』の第2部第Ⅲ章を「貧民」と題し、最初に、スコットランド全土における貧者の分布状況を確認しようとしている。そのために、まず次のような統計表(表1)を掲げている。その基礎となっているのは、もちろん、『統計によるスコットランドの評価』である。

表 1

教 区	州	人口	貧者
1 Inchinnan	レンフリーシャー	306	4
2 Rathven	フォファーシャー	280	4
3 Lethendy	パー ス シャー	367	3
4 Glenholm	ピーブルシャー	300	3
5 Oathlaw	フォファーシャー	450	2
6 Glencross	ミッド・ロージアン	385	2
7 St Madois	パー ス シャー	300	2
8 Dalton	ダンフリーズ	615	1
9 Lyne and Megget	ピーブルシャー	152	0
10 Heriot	ミッド・ロージアン	300	0
合 計		3435	21

出所 Sir John Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Part II, p.141.

24) Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Part I, p.59.

25) Sinclair (ed.), *The Statistical Account of Scotland*, Vol.1, p.14.

ちなみに、ここで「貧者」(Poor)といわれているのは、教区の救済基金から給付を受けている者たちである。

しばらく、この統計表に対するシンクレアーのコメントに耳を傾けてみよう。ここに抽出された教区は、人口が300人から615人までであるので、比較的小さい教区だと言える。そのなかで特にボーダー地方に位置するリン・アンド・メゲットとローランド地方東部に位置するヘリオットの教区では、貧者がまったく記録されていなかった。そのうえ、セント・マドイスでは貧者が2名と記録されているが、この2名という数は80年以上もこの数字であった²⁶⁾。したがって、この教区の救済基金は「200ポンドを越えるほど」にまで蓄積されていた。その結果、利子付きで貸し付けもなされ、こうして本来の目的とは異なった使用法がとられてきたのであった。

わずか一名しか貧民台帳に記載がないダールトンでは、その基金の必要性が低かったので、1775年には週ごとの徴収がまったくなされなかった。

貧民の記載がないリン・アンド・メゲット教区とヘリオット教区について、シンクレアーは、『統計によるスコットランドの評価』の当該箇所への参照を求めつつ、リン・アンド・メゲット教区については、「こうした状況は、住民たちが儉約と勤労に努めたことばかりでなく、彼らの名誉心と彼らの独立心とに帰される」と指摘している。この教区では、調査の年ばかりでなく「長年にわたって」、「貧者」は登録されなかったのである。また、ヘリオット教区につい

ては、「節約と勤労意欲とが合わさって、下層階級の人びとを困窮を上まわる状態に置いてきたのであった²⁷⁾」と説明する。すでにシンクレアーは、貧困問題を住民の主體的なあり方、すなわち、「勤労意欲」、「節約」、「儉約」、「独立心」、「名誉心」などの住民の性格と絡めて捉えようとしていたことが窺われる。それはともかく、シンクレアーは、このような統計表から、さらに興味深い問題を摘出する。

うえに掲げた10の教区に「貧民」の総数21名を総人口3,435人で除すると、約0.6パーセントという「貧民」率が得られる。これをスコットランド全体の人口数約2,000,000人に乗ざると、得られる「貧民」の数は12,277人ということになる。しかし、1820年にスコットランド教会の「ジェネラル・アセンブリー」で実際に報告された「貧民」の数は、44,199人であった。しかも、イングランドとウェールズにこの比率を当てはめてみると、総人口数が約12,000,000人なので、「貧者」はわずか73,362名にすぎないが、1813-15年の3年間の平均で、実際の「貧者」の数は、939,975名にもおよび、これは総人口の約7.8パーセントに達した。こうした点から、シンクレアーは次のように指摘する。

このことが証明していることは、貧民の数が増加するのは、人口密度が高くなったり、生活様式が贅沢になったり、また、その結果、悪習慣がはびこったりするにつれてであることである²⁸⁾。

明らかに、シンクレアーは「貧民」が田舎で

26) Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Part II, p.142.

27) 以上、*Ibid.*, Part II, p.142.

28) *Ibid.*, Part II, p.142.

はなく都市に、しかも大都市に集中している事実を確認していた。すなわち、「貧民」の都市へ偏在という事実である。というのも、すでにシンクレアーは、「貧民」問題にかんして、住民の主体的な問題がおおきな鍵を握ることを示唆していたが、ここで、住民たちが住む環境に目を向けているからである。すでに「はじめに」で指摘したように、農業と製造業の発展は都市化とその拡大をもたらした。こうした経済的・社会的変動によって引き起こされた変化に、シンクレアーは着目しているのである。すなわち、都市、とりわけ大都市では住民が過密化していること、と同時に、ふつうの都市生活者の生活水準は量的にも質的にも田舎のそれよりも高いが住民間の格差が大きいこと——そうした環境の変化がさらに、「悪習慣」を生み出す可能性が高いことに注目している。この「悪習慣」は当然のこと、住民たちの主体のあり方を規定することにもなる。

そもそも、第三章「貧民」の冒頭の文章は次のように始まっていた。

貧困(indigence)は、現行の社会構造および神の摂理のもとでは、必然的に何らかの形で存続するに違いない。地域社会の政治的なまとまりが大きくなると、救貧法による生活保護受給(pauperism)は決して完全には根絶できない。しかし、小さな地域では、その住民たちの生活様式は質素であり、贅沢心を満足させることは知られていないし、家族の愛情は保持され深められており、しかも、独立心が維持されているので、救済の対象になる者はほとんどいない。もしそうなった場合でも、彼らは容易に養われる²⁹⁾。

都市での環境と異なって、「小さな地域」である田舎では、「生活様式が質素」なため、それほど多くの金銭収入を必要としないし、家族、親類などを基礎とした村落共同体の絆も強かったであろう。そうした絆が、生活保護受給者の発生を自発的に予防する作用として機能したことは十分に予測できる。しかし、この「質素な生活様式」こそが、スコットランドの改良運動、啓蒙運動のなかで克服されるべき課題の一つと見なされてきたことでもあった。

シンクレアーが、前節で確認したように、みずからの「統計学」的研究のめざすところを現在での「国民の幸福」に定めていたことを考慮すると、とうてい「小さな地域」への後退を構想し、推奨していたと考えることはできないであろう。むしろ、都市、しかも拡大し続ける都市における「貧民」の問題に取り組むことこそが課題であったというべきであろう。この問題は、急激に進展してきた工業化によって生み出されたのであり、こうした進展過程のなかにこそ、この問題の解決法を見出すことが最優先の課題だと認識していたように思われる。「神の摂理」の問題はおくとしても、シンクレアーは「貧困は、現行の社会構造の……もとでは、必然的に何らかの形で存続するに違いない」とはっきりと認めていたとしても。いや、むしろ、認めていたからこそ、この困難な問題に真剣に取り組む必要があったと言うべきであろう。

貧困は、しかしながら、非常に数多くの事情から生じてきているので、人口のおおい地域で彼ら〔「貧者」〕を守ることは不可能である。われわれはもっとも高い権威から、『貧者は

29) *Ibid.*, Part II, p.141.

国から決して絶えることはない』と言われて
いる。……しかし、われわれは、貧民の数を
減らし、彼らの生活状態を改善し、本当に困
窮している者たちを扶養する手段をつきとめ
ることを目指して、貧困の原因を確かめる努
力を少なからず求められている³⁰⁾。

社会から「貧者」を撲滅することはその性質
上まったく不可能だとはいえ、これを少しでも
緩和し改善することができるはずである。その
ことを実現するためには、「貧困の原因」を詳
細に検討する必要があると言うのである。シンク
レアーは、これらの原因を11に区別して取り上
げている。

第1は、幼児あるいは14歳以下の子供、そし
て70歳以上の老人であって、身寄りがない者た
ちである。かれらは公的な救済の対象者であっ
た。

第2は、生まれつきの病弱者あるいは障害者
である。彼らについては、シンクレアーは、
「ジェネラル・アセンブリー」の報告書から、
盲目者が745名、聾啞者が542名と述べているが、
おそらく、この数字には「見落としがあるだろ
う」と付け加えている。他に、4,500人をくだ
らない精神的障害者がスコットランドにはいた。
これらの人びとは「公的な扶養」を受ける権利
を持っていた。シンクレアーは、「そのような
不幸な環境におかれている者たちを扶養するの
は、道徳的責務、すなわちヒューマニズムの感
情によってと同様に宗教心によっても強制され
る義務である」³¹⁾と指摘している。

問題は、実は他の原因にあった。第3に指摘

されるのは、労働の低賃金である。

これは、労働者があふれている時に、競争に
よって賃金が低く引き下げられることによっ
てしばしば生じる。平均数よりも家族が多い
場合、しばしばこれと同じ効果を持つ。貨幣
価値の上昇、あるいは、課税負担の増加も、
それがいかなるものであっても、同様に、労
働の成果一般〔賃金〕を生活するのに不十分
なものにする。特に、食糧価格の上昇がそれ
に比例した賃金の上昇によって償われない食
糧不足の時には、このことが生じるに違いな
い³²⁾。

「はじめに」でも述べたように、スコットラ
ンドの経済発展、特に綿織物製造業の発展の大
きな武器は、低賃金であった。しかも、ナポレ
オン戦争期のインフレーションが労働者の実質
賃金を引き下げるように作用したであろうし³³⁾、
また、実際に、例えば、1795-96年には食糧不
足と物価騰貴が起こった³⁴⁾。これが決して唯一
の原因であったというわけではないが、低賃金
に支えられたスコットランドの製造業——と
りわけ綿織物製造業の構造的体質は、外的な悪
影響をうけることによって、都市労働者の生活
を脅かし、かれらを「貧民」におとしめる危険性
が常に存在していたとすることができるだろう。

このこととも関連するのが第4の「雇用不足」
であった。スコットランド、とりわけグラス

30) *Ibid.*, Part II, pp.142-143.

31) *Ibid.*, Part II, pp.143-144.

32) *Ibid.*, Part II, p.144.

33) J. H. Treble, 'The Standard of Living of the Working Class', in T. M. Devine and Rosalind Mitchison (eds.), *People and Society in Scotland, Volume I, 1760-1830*, Edinburgh: John Donald Publishers Ltd, 1988, p.200.

34) Whatley, *Scottish Society 1797-1830*, p.304.

ゴウにおいては、時代をくだるが1831年には「労働力のほとんど4分の1は臨時雇い」であったという報告もある³⁵⁾。シンクレアーは、さらに現場に立ち入った事実の確認を行う。

このこと〔雇用不足〕は、もっともよく調整された社会でもしばしば起こるに違いない。同じ種類の労働が常に需要されるとは限らない。建設業のような戸外で行われる数多くの労働は、天候が不順な季節には有利に営まれるはずがない。さらに、屋内での労働でも、なかには壁塗り、塗装、壁紙張りのように、天候に恵まれたときにだけ適切に実行されるものがある。このような不安定な職業の場合には、労働者は一般に割高の賃金を受け取っているため、この利点を活かし節約すれば、彼らは、1年のうちで仕事がない時期の間自分たちを養うことができよう。しかし、これはまさに、彼らがめったに実行できない慎重な行動なのである。特に、彼らが救済用の公的基金を利用する権利を持っているときにますます実行できないのである³⁶⁾。

シンクレアーが着目しているのは、綿織物製造業のような勃興しつつある製造業労働よりもむしろ、従来からの——特に天候に左右されやすい労働についてである。確かに、こうした労働は、それ固有の性格によって仕事、したがって賃金収入も不安定だっただろう。それにしても、ここで注意を引くのは、たとえこれらの仕事が不安定であっても、その賃金は、相対的に「割高」であって、したがって、その高い賃金

から、常に起きる可能性がある無収入の事態に備えて蓄えを行おうとしない——こうした労働者の生活態度を、シンクレアーが指摘していることである。このことは、すでにシンクレアーによる他の説明のなかでも言及されていた重要な観点であろう。

ところで、シンクレアーはこうした従来型の労働についてのみ「雇用の不足」を問題していたわけではなかった。彼は、「しかしながら、雇用の不足がしばしば生じる因果関係は、市況の停滞、あるいは、公共事業、あるいは、私人の地所の改善を目的とした大事業が終了した時の労働の突発的な中断のようなものである」³⁷⁾と付け加えることも忘れていないからである。すでにシンクレアーは、景気変動——それは循環的な景気変動だと決して言えないが——により、雇用状態が規定されていることを認めていたことを窺わせる。だが、残念ながら、それは単なる指摘にとどまっており、それほど、詳細というわけではない。シンクレアーはのちにこの点について再度取り上げる。

第5に指摘されるのは、「早婚」である。若者のなかで早く結婚する者たちは、生活を立てる「合理的な見通しもなく」、結婚すれば生活費が増加するのに、「この増加に比例して勤労に精を出すこともない」。しかも、彼らの家族の人数は、彼らよりも遅く結婚する者たちの家族よりも「ほとんど様におおい」。こうして、早婚は「貧者の数を増加する大きな原因となる」³⁸⁾。

第6に、予期しない事故や災害などによって一家の稼ぎ手を失った場合、残された家族は生活に事欠くことになる。その代表的なものは、

35) Devine, 'Scottish Urbanisation', p.130.

36) Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Part II, p.144.

37) *Ibid.*, Part II, p.144.

38) 以上、*Ibid.*, Part II, 144.

漁船等の海難事故である。その場合、彼らは「慈善基金」の対象者となる。さらに、火災、水害、強盗などにあつたときには、「これらのもっとも有徳で勤労意欲に富む人びとも心ならずも、しばしば社会の慈善の対象となる可能性がある」³⁹⁾。しかし、この場合には「臨時的な救済」を受けるに過ぎないが⁴⁰⁾。

第7に、製造業が確立するにつれて「貧者」が増えてくる可能性がある、とシンクレアーは指摘する。

製造業都市には、常に多数の貧民がいる。市況のよいときには、すべてのタイプの多数の労働者が当然製造業都市に群がる。労働者たちが流入しないように用心するのは、製造業を営んでいる者たちの利益に反する。したがって、多数の者たちが、市況がおもわしくなくなったり、あるいは、病気や働けない状態が彼らを襲うと、必ず、欠乏状態に陥り、社会に負担をかけるようになる。一般的に言って、農業で雇用されている人々のマナーや個人的な習慣は、慎重であり儉約的である。他方、製造業で雇用されている人々の場合は、その反対が当てはまる⁴¹⁾。

シンクレアーは、「貧困」の第4の原因として「雇用不足」をあげた際に、「市況」の変化によって失業が生まれることを付け加えていた。ここでは、この点を前面に押し出して捉えるのである。繊維産業を中心とした都市での産業発展は、主にその周辺地域から労働力を多数引きつけ、それによって実現された低賃金がスコツ

トランドの繊維産業を強化した事実については再三指摘しておいた。だが、製造業は常に順調に発展するわけではなかった。それは市況の変動から大きな影響を受ける。高進時に拡大した雇用は、不況になれば縮小されざるを得ない。さらに、病気やけがは、労働者から賃金収入を奪うことになる。この場合には、偶然の災害にあつて困窮した者たち同様に、「臨時の救済」を受ける資格を持った。

しかし、ここでも留意すべきは、シンクレアーが、農業労働者と製造業労働者の「個人的マナーや習慣」を対照的に描いていることである。すでに指摘したように、シンクレアーは、都市での生活環境は「慎重さ」や「儉約心」を損ねる習慣を培う傾向がある、と理解していた。こうしたシンクレアーの理解は、以下に見る「諸原因」に関する彼の説明の基底を貫いているように思われる。

第8に、病気になったり、あるいは老齢化すると、「公的救済」の対象になるということを労働者たちが知ると、彼らは、「高賃金」を得ている時にその高収入にしたがった生活振りにふけり、「放蕩」ともいふべき生活をしばしばおくるのであつた。しかも、「公的な救済」を受けるようになって、このような「習慣」を脱却することは彼らには難しかった。つまり、「公的救済」措置が、かえって労働者たちの「慎重さや儉約心」を損なう可能性がある、と、シンクレアーは指摘しているのである。彼は、キルウィニング (Kilwinning) とカークインチロツホ (Kirkintilloch) の事例に参照を求めつつ、「……したがって、高賃金は、もし慎慮を働かして生活しないならば、その個人にとって利点になるどころか、将来惨めになる原因となり、しがって、社会に対する経費の追加とな

39) *Ibid.*, Part II, p.145.

40) *Ibid.*, Part II, p.149.

41) *Ibid.*, Part II, p.145.

る]⁴²⁾と警告せざるを得なかった。

こうした都市での「放蕩」、「浪費」の習慣は、低所得者にとりわけ悪影響を及ぼした。シンクレアーは、これを捉えて「贅沢な生活」を第9番目の原因として数えた。都市の下層階級の人びとの間には、とくに喫煙や飲酒（特にウイスキーの飲酒）の習慣が広がっており、これは明らかに、彼らの生活状態にとっては「贅沢」であり、それは直接生活苦の原因となるばかりでなく、「健康と勤労」にも害を及ぼした。シンクレアーが見るところでは、通常の賃金であれば、家族に病人や高齢者を抱えていても、「贅沢心を満たす」ことがなければ、十分生計を立てることができた。まさに、喫煙、飲酒に象徴される「贅沢な生活」こそ、下層の人びとをいっそうの「貧困」に追いやる「原因」と見られた⁴³⁾。

第10番目には、労働者の個人的な「性格上活力が不足している場合」があることがあげられた。「勤労や継続的な仕事」を嫌悪するので、彼らは、やがては「貧困状態」に陥らざるを得なかった⁴⁴⁾。シンクレアーは、これについて何もコメントしていない。しかし、こうした人物は、生来そうした性格を有していて、数は多くないとはいえ、どこにでも存在すると考えられるが、都市での生活は、概して他人に無頓着であったことを考慮すると、田舎よりも都市の方が、このような「原因」は大きく働いたと推測される。

このように見てくると、シンクレアーは、スコットランドの当時の貧困問題の状況を、社会経済の激変にともなう環境の変化、そしてその環境のなかで生き抜く人間の主体性の形成の欠

如に焦点を当てて捉えようとしていたように思われてくる。事実、最後に「貧困」の「原因」として、シンクレアーは、「悪徳」(Vice)をあげ、「しかし、すべての困窮の原因のなかで、不品行(profligacy)がもっともおそれられるべき原因であり、根絶するのがもっとも困難なものである」⁴⁵⁾と明言している。

シンクレアーは、18世紀末から19世紀初頭にかけてのスコットランドの工業化、都市化とその拡大が、スコットランドの「貧民・窮民」問題を深刻化した背景をなしていたと理解していた。しかし、そうした田舎(農村)社会から都市(産業)社会への歴史的推移を必ずしも否定的に捉えていたわけではなかった。むしろ、こうした問題状況を引き起こしたのは、主として、都市に住む住民、とりわけ、その下層階級の主体的なあり方、生活マナーであり、生活習慣であった。では、こうした理解の上で、シンクレアーはどのような対策を模索しようとしたのであろうか。節を改めて検討してみよう。

Ⅲ 貧民問題に対する対策

もちろん、すでに折に触れて言及してきたように、実際に「困窮」状態に陥った場合には、「公的救済」の手がさしのべられた。この救済を受ける資格は、スコットランドでは厳しく制限されていた。例えば、通常、失業者であっても健常者はその資格を有さなかったし、また、扶養義務を負う親類がいれば、その資格に値しなかったのである。とはいえ、これは「貧民台帳」記載による救済の条件であって、そのほかにも「公的救済」は施されていた。したがって、

42) *Ibid.*, Part II, p.146.

43) *Ibid.*, Part II, p.146.

44) *Ibid.*, Part II, p.146.

45) *Ibid.*, Part II, p.146.

この対象となった「貧民」は、「貧民台帳永久記載者」、「臨時的被救済者」、「物乞い免許者」のカテゴリーに大別される⁴⁶⁾。

こうした「公的救済」の問題を別にして、シンクレアーは、この問題への対策を二つにわけて構想した。その第1は、「貧困を予防する、あるいは、それへの圧力を弱める手段」であり、もう一方は、実際に「貧者を実際に雇用する手段」であった。最初のものから検討してみよう。

シンクレアーは、5つの「予防手段」について言及している。その第1は「教育」である。トマス・チャーマーズにならって、シンクレアーは、「生活保護受給を道徳的に矯正するには、すべて[の手段]のなかで、教育がこのうえなく力を発揮する」⁴⁷⁾と述べる。この点では、イングランドよりもスコットランドの方が熱心であって、「カーク・セッション」では貧しい子供たちに授業料を支払って教育機会を与えていた。これによって、「子供たちの道徳心と知性は大幅に向上した」ことを、エクフォード(Eckford)教区の事例に言及して、シンクレアーは指摘している。シンクレアーは、こうした「道徳心と知性の向上」によって、「儉約心や思いやり[が育まれ]、まだ稼いでもしないものを消費したり減多にしないし、また、人生において避けることのできない事故に備えそこなわない」と理解していた⁴⁸⁾。

第2は、幼いときから家庭と学校で宗教教育を施すことである。シンクレアーは「宗教的諸

原理はモラルに関する防波堤になる」と考えていたからである。スコットランド教会のもとの教区学校における宗教教育、家庭で親が子供たちにキリスト教の教えを話して聞かせていたことなど、スコットランド人の一般的な宗教心の厚さを指摘している⁴⁹⁾。

第3に、シンクレアーは警察による厳格な犯罪取り締まりを強調する。というのは、シンクレアーによれば、下層の人びとは、法により処罰を受けるとなると、勤労に励むようになり、処罰を受けないと、正当に労働して稼ごうとしないものだからである。したがって、「効果的な警察行為は、生活保護受給の増加を防止する傾向がおおいにある」⁵⁰⁾とシンクレアーは主張する。

シンクレアーが第4に取り上げたのは「貯蓄銀行」であった。労働者が節約して貯蓄するといっても、通常の銀行に預金するには、その額はあまりにも少額に過ぎた。その点で、貯蓄銀行設立の意味は大きい。しかも、利子を生むし、盗難に遭うこともない。そして、予期せぬ事態に備えることができるのである。こうした点から、シンクレアーはその「安全性と有利さ」を強調し、「それゆえ、議会が貯蓄銀行を支持し援助すれば、これほど得策はない」と断言する。だが、シンクレアーの見る現実は厳しかった。下層階級のうちの多数の人びとは、貯蓄銀行に預金することを嫌っていた。むしろ、余裕ができると、それを隠す傾向があった。彼らは、それが発覚すると、むしろ、教区の「公的救済」を受けるようになったときの障害なるのではないかと、と恐れたからであった。したがって、シ

46) この点を含めて、「公的救済基金」などに関するシンクレアーの説明と分析については、cf. *Ibid.*, Part II, pp.148-176.

47) *Ibid.*, Part II, p.193. なお、チャーマーズによる(宗教)教育の重視に関しては、さしあたり、関、前掲論文を参照いただきたい。

48) 以上、Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Part II, p.194.

49) *Ibid.*, Part II, pp.194-195.

50) *Ibid.*, Part II, p.195.

ンクレアーは、その具体的方策については口を閉ざしているが、「彼らがそのような疑念をいなくいかなる正当な理由もなくなるように、あらゆる手段がとられるべきである」と提言している⁵¹⁾。

最後にシンクレアーは、相互援助組織であった「友愛組合」(Friendly Society) について言及する。

しかし、友愛組合の設立は、これまで考案されてきた方策のうちで、困窮状態を防止するのに、もっとも適切な方策である。それは、下層階級の間で独立心を育む傾向をもつからである⁵²⁾。

シンクレアーは、友愛組合について、『統計によるスコットランドの評価』の諸巻によりながら、これまでのさまざまな事例を紹介し、それを通じて、その特徴とそれが「困窮状態の防止」にいかに関与したかを摘出している。

まず、エアーシャーのニューミル教区のケースでは、メンバーが病気でベッドにつくようになると、週に1ペニー、ベッドから離れても働くことができないときには、週に半ペニーが、それぞれ他のメンバーから贈られた。こうした金銭の給付とは別に、高齢者や病人に、組合の基金を使って、食糧や石炭、そのほかの必需品を贈ることはよく行われていた。しかも、こうした財貨は、同時に、組合員に原価で販売されていた。これには、「大量購買」がもたらす利益が生じ、「こうして、肉やほかの必需品の価格を安価に保つことになった」。この事例とし

て、シンクレアーは、ウィックの教区やイースト・モンクランドをあげている。また、トラネント (Tranent) の教区では、1792年に熱病のために30人以上の子供たちが父親を亡くし、それとともに寡婦になる者もでてきたが、友愛組合からの給付金によって、誰一人として「公的救済」を受けることはなかった。こうした事態を受けて、シンクレアーは、『統計によるスコットランドの評価』が示す幾つかの事例では、「こうした組合によって、生活保護受給者の数は減少してきており、また、[財産に課税される] 割当金の導入が阻止されてきた」ことがはっきりと示されている、と評価している⁵³⁾。

こうしてシンクレアーは、友愛組合に大いに期待することになり、「カーク・セッション」のもとに教区の「友愛組合」を設立し、その基金として「貯蓄銀行」を活用するために（「必要であれば、[これに] 割当金」を含め）、これと合体した組織をつくれれば、それは「工夫しうる最良の全体を包括する組織」になるだろうと構想している⁵⁴⁾。

シンクレアーは、このように「友愛組合」のもつ金銭的、物質的な利点を確かに強調していたが、うえに紹介したように彼は、「友愛組合」がメンバーの「独立心」を育むことを指摘していた。しかも、彼によれば、そもそも、メンバー相互が金銭的・物質的な利益を享受できる「友愛組合」への加入条件は厳しいものがあった。飲酒の習慣、無礼な態度、不品行などが、加入を阻んだ。もちろん、加入が認められても、規則は遵守しなければならなかったし、特権も許されなかった。その意味でも、「友愛組合は、

51) 以上、*Ibid.*, Part II, pp.195-196.

52) *Ibid.* Part II, p.196.

53) 以上、*Ibid.*, Part II, p.196.

54) *Ibid.*, Part II, p.197.

〔個人の〕モラル〔の向上〕にとっておおいに好都合である〕⁵⁵⁾。

前節では、シンクレアーが当時の「貧民問題」の究極原因をどのように摘出したかを吟味したが、彼は、その検討結果に相応しい予防手段を提唱したのであった。それは、特に怠惰や放蕩、華美、墮落などの誘惑の多い都市生活における規則正しい生活習慣、勤労意欲の維持・向上、先見の明、思慮深さ、知性、宗教心など、総じてモラルの向上であった。そのために社会の、宗教上の、教育上の、そして行政上の制度環境づくりを提唱した。そのためには、住民相互が協力することが必要なことに彼は十分気づいていた。それを象徴するのが、「友愛組合」に対する彼の高い評価であった。

こうしたシンクレアーの主体形成の姿勢は、直接「貧民の雇用」によって問題に対処する方策について考察する彼の論述のなかにも窺われる。次にこのことを確認してみたい。

シンクレアーは、この方策を3つにわけて捉えている。その第1は、ワーク・ハウスや矯正所などで「貧者」を働かせることであるが、彼はこれについて、『統計によるスコットランドの評価』の諸巻において、ワーク・ハウスは、腐敗が進み経費が掛かるとして、強い反対を受けている⁵⁶⁾と述べている。実際、彼自身も、例えば、ワーク・ハウスで「貧者」たちが何かを製造するとすれば、「生産性が低いのはふつう」だとしても、同業者の営業を圧迫し、公費をつかって、「ほかの者たちを貧困に追い落とす」ことになるので好ましくないと判断している⁵⁷⁾。もっとも、リネン製造業に関しては、「……

多大な手労働を要するフラックス栽培とその後のリネン製造との両方において、貧者にたくさん雇用を用意するであろう⁵⁸⁾と述べている。不可解なことに、この場合には、シンクレアーは、製造業一般に言及した際に問題にした欠点については口をつぐんでいる。もっとも、確かな証拠はないが、リネン産業ではまだ生産・供給不足状態にある、とシンクレアーは認識していたのかも知れない。

とはいえ、こうしたシンクレアーの態度には別の要因が働いていたようである。シンクレアーは、ワーク・ハウスあるいは刑務所での食糧生産——手回し粉ひき臼による製粉とパンではなく、乾パン (biscuit) 作り——については、賛成しているし⁵⁹⁾、衣類製造や靴製造についても、「得策だ」と明言しているからである。つまり、これらはワーク・ハウスや刑務所に収監された者たちの自家消費の必需品の製造を意味し、それによって公的な経費が節約されると、シンクレアーは考えていたと推測される。あるいは、さらに進んで彼は、収監者たちは、——ワーク・ハウスのなかとはいえ、できるだけ自己の力で生活資料を調達するようにすべきだし、そのような習慣を身につけるように求めていたのかも知れない。もしそうだとすれば、それはシンクレアーの一貫した態度の表れだと理解することができるであろう。

2番目にシンクレアーが論じたのは、農業での「貧者の雇用」である。そのなかで目を引くのは、荒蕪地の開拓である。彼は、「荒蕪地の

55) 以上、*Ibid.*, Part II, p.197.

56) *Ibid.*, Part II, p.201.

57) *Ibid.*, Part II, p.202. このような見解には、トマス・チャーマーズによっても共有されている。さしあたり、関、前掲論文を参照願いたい。

58) Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Part II, p.205.

59) *Ibid.*, Part II, pp.203-205.

改良は、健康な貧者を雇用する優れたやり方である」と断言する。それは、単に荒蕪地を耕作地や植林地に変えるだけのものではない。シンクレアーは、ウィリアム・ペイリーによりながら、「貧者を農業に雇用することは、すべての慈善のなかでもっとも崇高なものである。たとえば、そのような企画から上がる利益でその経費をまかなえないとしても、この気前よい企画の創始者たちは、その慈愛という項目に重大な変化を引き起こす資格を持つ。そのような計画は、ほとんどすべて、それがその所有者にどうであれ、社会に利得をもたらす。その損失を免れることができる場合には、これを考えれば、彼の慰めにとって十分であるべきである」⁶⁰⁾と主張する。ここには、ある意味での農業・農村重視のシンクレアーの姿勢が看取できる。

最後に、公共事業が取り上げられる。すなわち、「貧者」を雇って、道路や、運河、港を建設するのである。シンクレアーは、その場合に、労働者が「頑強」であり、「十分な程度の技術」を持ち、「正規の監督制度」が整っている必要があると言う。こうした交通・輸送手段の建設・整備は、当時の経済社会の発展にとって決定的に重要であった。だが、シンクレアーは、このような公共事業をすべて公的に行うことを認めていない。その資金は、工事のケースによって、全額貸付、必要額の一部提供、全額提供にわけべきだ、と主張する。しかも、「公共事業計画は、その時の市場における労働需要の状態にしたがって、その雇用する人数が決まるように工夫するようにしたらどうか、と言われてきた」⁶¹⁾と指摘している。シンクレアーは、あく

までも労働市場が供給過剰状態にあり、その失業者の削減のための公共事業であるという立場を保持していたとすることができる。それと同時に、注目すべきことに、「このようにして雇用される労働者は、自由な労働者として雇われるのであって、生活保護受給者として雇われるのではない。たとえば、彼らの賃金が平均賃金よりも低かったとしても」⁶²⁾と付け加えることを忘れていない。

ここでシンクレアーは、「貧民」としての失業者に人間的尊厳を認め、これを強調しているということができるが、そのことは、無条件に失業者に働き口を用意して人間として処遇すべきだと単純に主張しているとは思われない。むしろ、シンクレアーは人間としての「独立心」、「名誉心」、「自由」を基礎にし、こうした美德を堅持するために「勤労」、「節約」「節儉」を発揮する存在として人間像を捉えていたと言うべきであろう。シンクレアーの主張する統計学が意味するところを考慮すれば、彼は住民が、特に都市の下層住民がそのような人間像をいかに取り戻すべきかに焦点をあてていたと理解できる。

おわりに

これまでシンクレアーが、当時急速な産業社会化と急劇な都市化を押し進めてきたスコットランドにおいて看過できない「貧民」問題をどのように論じていたかを吟味してきた。シンクレアーは、『統計によるスコットランドの評価』の資料を基に、実際に都市、しかも大都市のほうが「貧民」問題が発生する傾向があることを

60) 以上、*Ibid.*, Part II, p.201.

61) *Ibid.*, Part II, p.208.

62) *Ibid.*, Part II, p.208.

「事実」として突き止める。それは大都市が生み出す生活と労働の環境がそのように住民に強いるのであるが、それは、2つの側面から判断される。

第1は、農村の農業よりも都会の製造業の方が、市況の変動が激しく、その過程で常に「雇用不足」や「低賃金」などに都市の労働者たちは苦しめられることになるからである。このことが労働者の外的環境の変化に起因する問題だとすれば、第2は、労働者の内面に關わる問題だと言えよう。もちろん、シンクレアーが第10番目の貧困の原因に数えていた個人的な「性格上の活力不足」、言い換えれば生来無気力な個人もいるであろうが、むしろシンクレアーが問題にするのは、生来はそうでなくても、都会での生活と労働の環境によってそのような性格が形成されるという点である。

だが、シンクレアーは都会から農村・田舎に戻るようにそうした労働者たちに求めるわけではない。シンクレアー自身、これは時代の趨勢であり、むしろそのことを前提にして都会のなかで自己の性格形成をはかる道を推奨しているように思われる。そのためには、小さいときからの教育や宗教教育が重要だと指摘する。成人になっても、このことは大切である。したがって、友愛組合や貯蓄銀行、そしてその両者の結合が果たす役割の意義が強調される。

もっとも、ここでも問題がないわけではない。シンクレアーは、友愛組合が下層労働者たちの相互援助組織としておおいに効果を發揮してき

たことを確認している。しかも、その構成員たちは「独立心」を育む傾向をもつと述べる。だが、友愛組合への加入条件は、最初から性格が優れている者たちのみに加入を認めることになってはいないであろうか。最初から、選ばれた、その意味では、問題を抱えそうにないメンバーの組織として成立しているのではないか。問題は、むしろ、この厳しい加入条件をクリアできない者たちのはずである。そうだとすると、シンクレアーが、「カーク・セッション」のもと教区の友愛組合を設立することを提起していることは注目し得る。しかも、その資金の面では、貯蓄銀行の活用、「割当金」さえ利用を提言しているのである。教区が中心となる、その意味でキリスト教の隣人愛と結合した友愛組合は、確かに誰でも加入が認められるわけではないであろうが、それがカバーする範囲を広げることになろう。こうした社会的な生活組織を都市のなかに形成していくことにこそ、シンクレアーは、農村・田舎の共同体が「貧民」問題において果たしていた役割の代替を見出していたように思われる。そして、なによりも、こうした都市での社会的組織での活動を通じて、下層の住民たちは新しい産業社会にふさわしい主体形成を遂げる道のみずから切り開くはずだ、とシンクレアーは展望していたとすることができるであろう。

[九州大学大学院経済学研究院 教授]